

第5回

竹林管理をどうするかを考えるときに タケトンボの話をするな

中川重年さん（神奈川県自然環境保全センター）

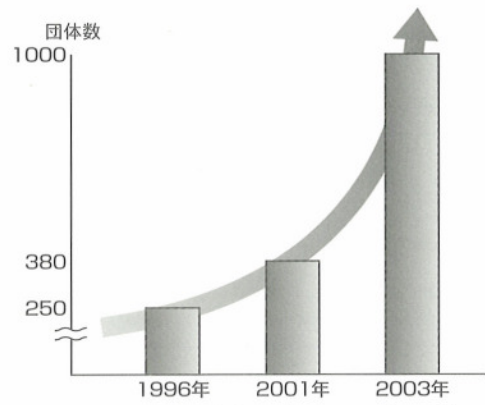


中川重年
1946年、広島県生まれ。全国雑木林会議世話人。森林を中心とした人間と自然とのかかわりについての調査や広葉樹の整備指針・保全活動などに力を入れている。

市民が参加して森に手を入れ、里山をつくる動きが加速している。今後どんな「市民参加の森づくり」が求められているのか。現状と課題を探った。

市民参加の森づくりの現状

スギ・ヒノキの単一林 → 森の手入れ不足で荒れた日本の森林の現状をよくしようと市民参加の森づくり団体が急増している



市民参加の森づくり団体の増加

市民参加の森づくり団体急増の背景には以下の3つの要因が考えられる

情報交換の場の増加

「全国雑木林会議」
「森林と市民を結ぶ全国の集い」
「森づくりミーティングフェスタ」
など

森の管理マニュアルの出現

「里山保全ハンドブック」
「神奈川県の里山林整備指針」
など



企業や行政の支援

林野庁、都道府県の林業行政、トヨタ自動車を始めとする大企業など



市民参加の森づくりが活発に！

初級の人、中級の人

この10年間の取り組みでレクリエーション的に市民参加の森づくりに参加する人＝初級の人的人的資源は随分と広がった。



次の課題は中級の人を育てること

中級の人たちは問題意識を持ち、社会と森林のつながりをどのように作りだしたらよいのかと考えているのではないだろうか。そうすると、彼らに不可欠なのは「量と質の違いを見極める力」である。よくたとえるのは、「竹林の管理をどうするかを考えるときに、タケトンボの話をするな」ということ。地域の森林全体の管理について考えるとき、地元企業と協力したり、新しい組織化を図って、「量」の話に転換していかなければならない。にもかかわらず、少量の材しか使用しないタケトンボづくりを呼びかけていても、問題の解決にならない。従って、状況を見極める力を持った人が市民側に必要になってくる。

また、「データを踏まえて発言する」ことも欠けている。自分たちでつけたことやデータを元にして発言する訓練がされておらず、マスメディアを鵜呑みにしてしまいがちだ。さらに、「地域」という視点を持って考えてほしい。自分たちの活動が地域にどのような影響があるのか、そこからどのような広がりや期待できるのか、社会にどう結びつけることができるのか――。

これからは市民側にも客観性が要求される時代になるだろう。

中級の人を対象にした企画、プログラムを

入門者・初級レベルの人たち向けのプログラムは全国で行われているし、今後も必要であるのだが、問題意識や技術を兼ね備えた中級の人も増えているのに、そこに対応するプログラムや仕組みがあまりない。中級者はうまくすればオピニオンリーダーになり得る存在だが、グループの育成力、質と量の見極め、データを元に発言する力を持つ人がなかなか現れないのが現実だ。



初級の人

週末は森づくりボランティアでいい汗かくぞ！

中級の人



20年後にこの森はどうなっているだろうか



そのためにはどの企業と組むのがいいのか



どうやって活動の採算性をあわせていくといいのか？



中級の人々の役割は「地域デザイン」だ

求められる人材

森と社会をつなげる
「地域デザイン」を担える人

つまりは中級の人が必要になってくる。中級の人々が成長してゆける仕組みや機会をつくろう

市民参加の森づくりを質と量で見極められる人

地域の20年後を考え、どんな森が必要なのかというビジョンをつくれる人

実現のために色々な人と組んでことをおこせる人